

平和のために、戦争を忘れず語りつごう

「こまえ平和フェスタ2009」に650人 市と市民が協働



作家 早乙女勝元さんが講演

8月2日、エコルマホールで「こまえ平和フェスタ2009—戦争を忘れないで語りつごう—」が市民と市の協働の実行委員会主催、市音楽連盟の後援により開かれ、出演者含め650名が参加しました。

駄倉保育園児と卒園児の可愛らしい「荒馬」の掛け声と踊りで始まった舞台では、玉田恵美子実行委員長の開会挨拶の後、矢野ゆたか市長が、平和フェスタが市民に定着し保育園児から戦争体験者までがここに集い反戦への想いを一つにしていると語り、核廃絶へ一人ひとりが声を上げようといひあいました。また道下勇市議会議員が、園児の民舞を観て平和を実感した、戦争ほど悲惨なものはない、この日本で二度と戦争を起こさない



狛江高校弦楽合奏部による演奏

よう草の根で頑張っていこうと挨拶しました。

狛江高校弦楽合奏部による「崖



早乙女勝元さん



矢野ゆたか市長



道下勇議長

の上のポニョ」などの演奏の後、講演した井上孝さん(狛江市文化財専門委員)は、銀座に住んでいた当時の何度にもわたる空襲のありさまと、翻弄された悲惨な生活体験を写真や地図のスライドを使って講演、「二度と戦争は起こしてはなりません」と嘯み締めるように語りました。

作家の早乙女勝元さんは、ここに参加できたことを嬉しく思うと切り出し、戦争を知らない世代が75%を占める中、過去から学ぶことの大切さを強調、「過去の教訓を学ばぬものは同じ過ちを繰り返す」は至言であり、現代を生きる者への警告であると述べました。

そして東京大空襲では、10万人が死亡し101万人が罹災、戦争で日本人310万人が犠牲になり、日本はアジアの人々200万人の命を奪った。この戦争がなぜ起きたか疑問を持ち、岩波新書を濫読し、平和憲法に希望を見出した。日本は憲法に逆行する道を歩んでいる。国際貢献を言うなら戦争をなくすことこそ最大の国際貢献と強調しました。

戦争体験者が減り、戦争は歴史になりつつあるため、追体験できるように資料と記録をそろえて戦災資料センターを建設した。「知っているなら伝えよう。知らないなら学ぼう」と訴えている。

憲法9条がなかった当時の1944年は軍事費が国家予算の85%を占め、1945年の平均寿命は男24歳、女37歳であった。来年5月には国民投票法が施行され、憲法9条は重大な岐路に立たされる、平和は一人から。一人ひとりが声を上げていきましょう、と語りました(次の頁に続く)。



オープニングは市立駄倉保育園の園児と卒園児による荒馬踊り

(前頁からの続き) 早乙女勝元さんの講演は、ときおり笑いを誘いながら体験を交えて語り、論理的でとても分かり易い講演でした。

舞台では狛江校演劇部による「狛江平和都市宣言」の力強い朗読が行われたあと、平和フェスタそうらん隊による元気の良いロックソーラン、平和フェスタ合唱団による「ぞうれっしゃよはしれ」などの合唱、また伝統ある調布狛江合唱団による「信じる」他の心に染み入るような合唱が披露されました。また小さな子供から青年まで豪快で、楽しそうに演奏するきんたの会・跳鼓舞の和太鼓があり、最後は「水と緑のまち」「世界に一つだけの花」を全員で合唱しました。

ホワイエ(ロビー)では丸木位里・俊作の原爆の図から「母子像」(1/2レプリカ)はじめ、広島・長崎の原爆写真、沖縄戦の写真、東京大空襲の写真、戦争と狛江の子供の紙芝居、市民の平和を願う絵手紙などが展示されました。また早乙女勝元さんの書籍販売(サイン会)、平和図書の展示、折鶴コーナーなど多彩な催しが行われました。展示は7月27日から31日まで、市役所ロビーでも開催されました。



狛江市平和都市宣言の朗読

戦争を語り継ぎ平和を願う想いを、一人ひとりが新たにしたい一日となりました。



フィナーレ、「水と緑のまち」「世界に一つだけの花」を合唱



きんたの会と跳鼓舞の和太鼓



丸木位里・俊作の原爆の図から「母子像」(レプリカ) 原爆の図より 母子像 第11部(1955年)

家の下敷きとなり、燃えさかる中を、親は子を捨て、子は親を捨て、夫は妻を、妻は夫を捨てて逃げまどわねばなりません。それがほんとうの原爆の時の姿なのです。だが、そうした中で不思議な事に母親が子供をしっかりと抱いて、母は死んでいるのに子供は生きているという、そんな姿をたくさん見ました。

丸木美術館の学芸員 岡村幸宣さんの話

それまで制作された第1部～第10部は大規模な世界巡回展が開催されたため、日本国内では実物を見る事ができなくなりました。そこで制作されたのがこの母子像です。重要なテーマの一つとして極限の状態でも揺るがない母子の愛が、「母子像」ではないかと思われれます。

(鈴木悦夫 記)



ホワイエでは、狛江の戦争当時の様子を描いた紙芝居や東京大空襲や広島・長崎の原爆の写真の展示コーナー、折鶴コーナー、平和図書コーナーにもぎわいました(左)



参加者の感想より

・保育園児の駒踊り、弦楽器の演奏、そーらんよさこい踊りなど多彩で、井上さんの空襲体験の話には丁寧な事実のお話に感銘を受けた。早乙女勝元さんの講演ではさすがに作家の職業柄でよくまとまったお話でした。特に戦争中の国の軍事予算が84%を占めること、そのお金で海外に派遣された兵隊さんが1000万近いとのこと、戦争は国民の富と人間とを食いつぶすものだという事を数字の面からも知らされ、国内的な問題だけでなく、周囲の国々にも多大の不幸を生じさせたことも合わせ考え、平和の大切さ、憲法9条の重さを実感しました。こんな活動を市民が中心となっている狛江をうらやましく思います。(60代男性)

・狛江市平和都市宣言を採択し、市民、各団体、狛江市共催で平和フェスタが開催されるようになって5年になるというそのこと自体とても素晴らしいことだと思います。

小さい子どもから若者、年配の方までと、幅広い年齢層がそれぞれの持てる力を発揮し、どのプログラムもとても良かったです。

早乙女勝元さんのお話は10年余も前に聞く機会があり、今回で2回聞くことができましたが、とても分かりやすく、胸にジーンと響くものがあり、平和を強く願うだけでなくもっと行動していかなければと、改めて思いました。

出演者の皆さん、実行委員会の皆さん、感動を有難うございました。(60代)

・5回目にふさわしい内容でした。

私は聴力障害なので社教へノートテイクの情報保障を依頼したところ、要約筆記がつくということで安心して参加できました。

私の知人の手話通訳を見ていた人は、井上さんの話の時、少し暗いので手話通訳の口元がはっきりしなかったとっています。手話通訳を利用する人は手話をする人の口元も見ていますので、暗いとそれが分からないとのことでした。

象列車がやってくる——朗読(ナレーター)があり、よく分かって良かったです。(60代)

・“忘れないで語り継ごう、戦争を!”この集いが市民レベルから出発し、市と市民の共催で力

強く継続されていることに深く感銘を抱きました。戦争がなくなるまでフェスタが続きますよう祈念しています。素晴らしい催しと思います。もっと多くの市民、特に若い人たちの参加を熱望します。世田谷区民として見守っていくつもりです。

早乙女さんのお話、是非「市報」に掲載して下さい。

報道機関はこの催しを知らないのでしょうか?(広報不足?)(70代)

・幼児から高齢者まで力を合わせて“平和”をテーマに様々なことを展開していただき、心があつたかく、また改めて平和を守るエネルギーを頂きました。平和でこそ文化も豊かに楽しめますね。音楽あり民舞ありそして貴重な戦争体験。講演は良かったです。平和を壊すもの、戦争の悲惨さなど、きちんと話を聞く機会も減っているのでは、こういう機会を作ってくださったこと大変良かったと思います。

実行委員の皆様ご苦労様でした。有難うございました。(50代)

・井上先生のお話、映像を交えて、興味深かったです。

早乙女さんのお話、分かりやすく、とても響くものがありました。平和フェスタのテーマにぴったりで、とても良かったです。

高校生の朗読、演奏も良かったです。ただ、ご本人たちの生の声(平和についての思い)を少しでも聞くことができればもっと嬉しいし、力になるなあと思いました。

若い人、子どもたち、戦争を体験なさった方、幅広くて良かったです。オープニングの荒馬も良かったです。

市の共催ということに価値を感じました。大変でしょうがこれからも宜しくお願いします。(40代)

・語り継ぐ必要性を汲み取ることができて良かった。それはこのような行事の継続が何よりも大事であろうか。

尽力された方々に感謝します。

年代を超えた取り組みに未来を感じられました。狛江高生の平和宣言も遅しく立派でした。

武力で平和はつukれない —アフガニスタンに緑と命を—

(ペシャワール会中村哲氏講演会から)

9月19日世話人4人で聞いてきました。

アフガニスタンの地で25年前から医療活動を始めた中村医師。その後、旱魃(かんばつ)にあえぐ現地の人々を見て、暮らしの土台から再建することが必要と考え、井戸掘り、用水路建設、植林と地元の人々と共に活動を広げました。24キロにわたり砂漠を灌漑する用水路は今年8月に完成。15万人以上の人々の生活を支えています。

100万人が飢餓線上にある国に対して食物ではなく爆弾の雨を降らせることはどういう意味があるのか、現実的に見て戦争しかないという風潮が世界中を覆っていく恐ろしさを、中村氏は講演の中で訴えられました。

日本はアメリカ追従で戦争に加担しているが、そうではなく平和国家として日本がアフガニスタンの人々の民生を支援していくことを考えるべきだと話を結びました。

問題はアフガニスタンにあるのではなく、豊かな生活をしながら戦争の手伝いをするを何とも思わない先進国の方に病理があるという言葉に、現場からものを見て行動する人の鋭い眼差しを感じました。(小俣 記)

アフガンに緑の大地を



伊藤和也君◎追悼写真展

主催 ペシャワール会

2009年12月10日(木)～16日(水)

時間: 11:00～19:00 (最終日は17:00まで)

会場: モンベル渋谷ビル (5階)

渋谷区宇田川1-1-5 (渋谷駅徒歩8分)

(東急ハンズ向かい)

入場無料 (菜の花募金を会場で募っています。)

本の紹介 石風社

アフガニスタンの大地とともに
伊藤和也 遺稿・追悼文集
医師、用水路を拓く
アフガンの大地から世界の虚構に挑む
中村 哲 著
丸腰のボランティア
すべて現場から学んだ 中村 哲 著

蓮池透さん、来貊!

11.21 秋の学習会 にどうぞご参加下さい。

「北朝鮮の脅威」の実態は? 核兵器開発の狙いは?

その脅威をなくすにはどうしたらいいの? 拉致問題の解決は?

テーマ: 北東アジアの平和を築くために

日時: 11月21日(土) 1時30分～4時

会場: 狛江市民センター 第4会議室(2階)

講演: 拉致問題を解決するために

講師: 蓮池 透 さん (拉致被害者家族連絡会 元事務局長)

講演: 北東アジアの平和と日本の役割

講師: 川崎 哲 さん (国際交流NGO「ピースボート」共同代表)

皆さんで歌いましょう アリラン、イムジン河など(大熊哲さんの指導で)

参加費500円